

詩編 3 : 9

ルカによる福音書 18 : 18~30

「神にはできる」

<神の国に入るのは>

前回の聖書箇所最後のところ、18 : 17にはこのようにありました。

「はっきり言うておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」

神の国に入ること。つまり、神さまの恵みのご支配に生きること。滅びに至る罪から救われ、永遠の命をいただくこと。救われること。それは、「子供のように神の国を受け入れる人でなければならない」とイエスさまは言われました。

子供のような人。それはもう、この福音書を書いたルカに言わせれば、乳飲み子のような人、ということです。自分では何も出来ず、無力で、ただ与えられるものだけで生かされる人。受けることしかできない人。それが、乳飲み子のような人です。

わたしたちは、救いを、ただ神さまから与えていただくことしか出来ません。

自分の力で救いに達するだとか、何か良いことをした報いに救われるだとか、そういうことではないのです。わたしたちは自分の罪に対して全く無力であり、ただ、乳飲み子のように、神さまから与えられるものを受け取って、罪を赦されて、命を与えられて、恵みを注がれて、生かされるばかりなのです。

わたしたちは、そのようにして、救いの恵みを喜んで与えて下さる神さまによって、神の国に入れられる。わたしたちは、乳飲み子のように、ただその恵みを受け取るだけである。そういう人が、神の国に入るのだ。イエスさまは、前回そのことを教えて下さいました。

そして、今日の所では、24~25節にこのようにあります。「イエスは、議員が非常に悲しむのを見て、言われた。『財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。』」

神の国に入るのが「乳飲み子のような人」なら、入ることが出来ないのは、今日登場するような、財産のある金持ちの議員のような人だ、ということです。

それは、どのような人のことを言っているのでしょうか。

<永遠の命を受け継ぎたい>

まず18節には、ある議員がイエスさまに、「善い先生、何をすれば永遠の命を受け継ぐことができるのでしょうか」と尋ねた、とあります。

何をすれば、永遠の命を受け継ぐことができるか。何をすれば、救われるか。

もし、救いに至る確かな方法が何かあるのなら、わたしたちもそれを教えてもらって、ぜひ実践したいと思うかも知れません。

さて、まずここで注目しておきたいのは、永遠の命（それは、罪を赦されて、滅びの死から救われて、神の国、神のご支配の許に生きる者となること、つまり「神の国」や、「救い」と言っても良いのですが）、それは「受け継ぐ」ものである、ということです。

父親の財産を息子が受け継ぐ。ある人の所有物を、その人の判断と意志によって、他の人に相続させる。同じように、永遠の命、神の国、救いは、神さまが持つておられるものであり、それは神さまのご意志で、神さまが選ばれた人に、受け継がせるものなのです。

永遠の命は、ただお一人、神さまのもとにあります。イエスさまは「神おひとりのほかに、善い者はだれもない」と言われました。この「善い」というのは、恵みを得させる、恵み深い、という意味です。ただ神お一人が、恵みをお与えになる。神さまのほかに、救いを受け継がせることができる者はいない、ということです。

そして、父なる神さまは、この命を与える神の権威を、御子イエスさまに委ねられ、地上に遣わされたのです。イエスさまは、神の権威を持って、神の国を告げ知らせ、人々をご自分の許へ、救いの許へと招いておられるのです。

ただ、この質問をした議員は、まだイエスさまのことを、ただの力ある指導者としか思っていないかも知れません。

それでも、彼は真剣に尋ねたのです。何をすれば、永遠の命を受け継ぐことができるのか。何をすれば、神さまがわたしを永遠の命の相続人として認めて下さるのか。

あるいは、この質問によって、「あなたは立派な議員で、なすべきことはもう出来ているから、永遠の命を受け継ぐ者として十分ふさわしいよ。」そういう答えを期待して、救いの太鼓判を押してもらいたかったのかも知れません。

イエスさまは、これに対して、神さまが人に求めておられることは、掟、つまり神の律法に示されている。何をすればよいか、と聞くけれども、あなたはそれを知っているはずだ、と仰いました。イエスさまがここで挙げられたのは、「姦淫するな、殺すな、盗むな、偽証するな、父母を敬え」。十戒と言われる、神さまが与えられた十の戒めの、後半部分です。

このイエスさま答えを聞いて、議員は言いました。「そういうことはみな、子供の時から守ってきました」。

彼は、実際に自分がなすべきこと、神さまの掟を、よく知っていました。そして、それをしっかりと守ってきました。本当にそうだったのでしょう。そうでなければ、ユダヤ人の中でも、「議員」と呼ばれる高い地位につくことは出来なかったに違いありません。

それに、後でこの議員が金持ちであるということが分かりますが、当時、豊かな富は神さまの祝福のしるしと思われていました。つまり、彼は自分の行ないを自分で振り返っても、

他の人の目から見ても、「彼なら、永遠の命を受け継ぐことが出来る」と誰もが納得するような人だったのです。

しかし、それにも関わらず、議員はこの質問をした。それは、彼の心に、どうしても拭いきれない不安があったからではないでしょうか。

自分は、掟を守っている。富も与えられ、祝福も受けているはず。けれども、それで自分は「永遠の命を受け継ぐことが出来るか」と考えた時に、どうしても確信を持つことが出来ない。永遠の命を信じる事が出来ない。何か足りない気がする。まだ自分は何かしなければならぬことがあるのではないか。それで、彼は永遠の命の確かさを得たいと思って、イエスさまのところに来たのではないのでしょうか。

<天に富を積んで、従う>

そして、恐らくイエスさまは、議員から「掟は守っています」との答えが返ってくることを予想しておられたのです。それは、次のことを指摘するためです。議員の答えを聞いて、イエスさまはこう言われました。「あなたに欠けているものがまだ一つある。」つまり、この一つが、永遠の命を受け継ぐ決定的なものである、ということです。

それは、「持っている物をすべて売り払い、貧しい人々に分けてやりなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」ということでした。

これを聞いた議員は、「非常に悲しんだ。大変な金持ちだったからである」とあります。

この「悲しんだ」というのは、痛めつけられる、悶える、悩み苦しむ、という言葉です。単に、ああ、それは難しいな、残念だな、という思いを持ったというだけではありません。そのことで、本当に苦しんだ。身悶えするほどに、悩み苦しんだのです。

これは、他の聖書箇所では、イエスさまが十字架に架けられる直前、ゲツセマネで祈られた時に、「わたしは死ぬばかりに悲しい」と言われた。この「悲しみ」なのです。

さて、この議員の悲しみは、わたしたちにとって、人ごとの悲しみなのでしょうか。

お金を持っている人は議員に同情して、自分もそうかな、とドキリとするのでしょうか。

あるいは、わたしはそんなに大変な金持ちではないから、あまり関係ない。金持ちは手放すものが多くて可哀想だ。そんな風に思っているのでしょうか。

そうではありません。これは、単に金持ちだけが神の国に入るのが難しいと言われているわけではありません。地上の生活の中で、何かを持っているすべての者。生きるためのお金や、モノや、家、家族、健康、能力。多くても、少なくても、そのような何かしらを持っているわたしたちすべての者が、この議員の悲しみを覚えなければならないのです。

イエスさまは言われました。「持っている物をすべて売り払い、貧しい人々に分けてやりなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。」

これは、持ち物を売り払って、貧しい人に施すという行ないが、永遠の命を得るために必

要だ、と言っておられるのではありません。

持ち物をすべて売り払い、それを貧しい人に分け、天に富を積む。それはまず、わたしたちが地上の富、つまり、自分が今手にしているすべてのもの、心ひかれ、頼りにし、生活や人生の拠り所としている、それら一切を、手放すということです。

そして、自分のあらゆる持ち物から自由になって、自分の手にしているものに依り頼むのを止めて、ただ天におられる神さまだけを、自分のすべての拠り所として持つということです。わたしたちの心を、地上の富ではなくて、天の神さまに向ける。心を、生活を、人生を、すべて天におられる神さまにささげて、ひたすら心を神さまに向けて、一切を神さまの恵みに依り頼んで生きる、ということです。

あなたの一切を、地上のものではなく、神にこそ頼りなさい。あなたが地上で握っているものをすべて手放して、神からの恵みだけを受け取りなさい。そして、ただあなたは天の神にのみ心に向けて、わたしに従いなさい。

イエスさまはそう言って、この議員を、ご自分のもとに、永遠の命に、招かれたのです。

<不可能>

このイエスさまの御言葉を真剣に捉えるならば、わたしたちもまたこの議員のように、非常に悲しみ、もだえ苦しまなければならないはずです。

持っているものを手放すことが、どれだけ大変なことか。わたしたちの心が、こうしたいという思いや決意とは裏腹に、どれだけ欲望に素直であることか。どれだけ深く罪に捕らわれていることか。

結局わたしたちは、世のものを多く持つことで心が安らぎます。備えをして自分で将来を保証しようとし、何とかして損失を食い止め、自分の安心安全を確保しようとし、

しかし、イエスさまは言われます。あなたは自分が持っているものを一切捨てなさい。それに頼るのをやめなさい。

実はこれは、前回の、乳飲み子のようにでなければならない、ということと表裏一体ではないでしょうか。つまり、「すべてを売り払い、手放しなさい」というのは、「あなたは、受けることしか出来ないのだ」と言われているのと同じなのです。

あなたは、そもそも、自分で救いを得る力など持っていないのだ。あなたは、神から、すべてを頂くことしか出来ないのだ。そして、神は喜んでそれを与えて下さるお方なのだから、あなたは自分の手に握っているものを手放して、神の手からすべてを受け取りなさい。そう言われているのです。

それでも、わたしたちが「持っているものをすべて売り払う」ことは、とても困難です。神さまのみに心に向けること。神さまにのみ依り頼むこと。神さまに自分をお委ねし切ること。これが、出来ないのです。

神さまが与えて下さると言って下さっているのに。本当かな、と疑う。どこか不安に思っ

てしまう。目に見える、具体的に手に持っているものの方が、確かなものに思えてしまう。

でも、実はそれは、わたしたちが、十戒の最初の部分、まことの神以外を神としてはならない。神さま以外の偶像に頼ってはならない。この、もっとも重大な掟に背いている、ということに他ならないのです。

イエスさまは、わたしたちがそのような罪人であること、神さまの御心に従うことが出来ないことを、わたしたち自身よりも良くご存じです。

イエスさまは言われました。「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」

金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。それは、神さまに頼らないわたしたちが、自分の持っているものばかりを見つめているわたしたちが、神の国に入ることは、絶対に不可能だ、ということなのです。

これを聞いた人々が言いました。「それでは、だれが救われるのだろうか。」

そうです。だれも、救われることが出来ないのです。

わたしたちは、自分の罪が赦されるために、救われるために、何をすることも出来ない、というだけではありません。だから、神さまの憐れみに頼りなさい。神さまから与えられる救いを、ただ受け取りなさい。そう言われているのに、差し出されている神さまの救いを、ただ受け取るということさえ出来ないのです。

神さまに依り頼む、ということさえ出来ない。自分を委ねきること。神さまを信頼することが出来ない。絶望的なほどに、わたしたちは神さまから離れ、罪に捕らわれているのです。

<神にはできる>

ここで、イエスさまは言われました。「人間にはできないことも、神にはできる。」

イエスさまは、まず、はっきり言われました。「人間にはできない。」イエスさまは、わたしたちのどうしようもない罪を、弱さを、頑なさを、わたしたち以上にご存じなのです。

でも、こう言って下さいました。「神にはできる。」

そうです。わたしたちには出来ないことも、神にはお出来になるのです。神さまは、わたしたちに信仰を与えることがお出来になります。わたしたちの心を変えさせることがお出来になる。価値観を変えさせること。生き方を新しく変えさせること。恵みを受け取らせることが、神さまには出来るのです。

わたしたちは、神さまの御力によって、新しく造り変えていただくしかありません。

しかし、神さまの御力によるのならば。わたしたちは恵みを受け取る者に、変えていただくことが出来るのです。神さまが恵みによって、世のものを、手放させて下さる。神さまに、依り頼ませて下さる。イエスさまに、従わせて下さるのです。

救いへ、永遠の命へ至る、信仰もまた、わたしたちは神さまの力によって、神さまから与えられるものなのです。

しかしそれは、神さまがわたしたちをマインドコントロールできるとか、わたしたちの意志を失わせて、ロボットのように何でも言うことを聞かせられる、というようなことでは決してありません。

神さまには何でもお出来になる、という時。それは何よりも、神さまが、わたしたちを憐れみ抜き、愛し抜いて下さることがお出来になる、ということなのです。

そのために、天の父なる神さまに遣わされたイエスさまは、わたしたちに永遠の命を与えるために、わたしたちを救いへと導くために、ご自分の命を、罪人であるわたしたちに与えることさえお出来になります。

そのために今、イエスさまはエルサレムへ、十字架の死に向かって歩いておられるのです。

ご自分のゆえに、イエスさまは言って下さいます。「人間にはできないことも、神にはできる。」わたしにはできる。あなたたちのために、十字架に架かろう。あなたたちのために、絶望を叫ぼう。あなたたちのために、裁きを受けよう。そして、罪と死に打ち勝ち、あなたたちに、復活と永遠の命を与えよう。あなたたちを、愛し抜こう。

神にはできる。ただこのことだけが、わたしたちが救いに与ることができる理由です。このことだけに、依り頼むしかありません。わたしたちには出来ない。でも、神にはできるのです。これだけは、疑ってはなりません。だからこそ、救いはただ神さまにのみ、求めなければならないのです。

そして、神さまが、わたしたちを神の国に生きる者として下さるならば。神さまが、わたしたちを、永遠の命を受け継ぐ、神の子として下さるならば。神さまはわたしたちに、世の富を手放すことも、貧しい人に与えることも、苦しみを分かち合うことも、隣人を愛することも、敵を赦すことも。わたしたちが絶対に出来ないと思われるようなこれらのことも、なさしめて下さることがお出来になる。わたしたちを、そのように生きる者に変えて下さることがお出来になる。そう、信じて良いのです。

<約束>

さて、イエスさまの弟子であるペトロは、自分が身一つでイエスさまの招きに応え、弟子として従っていることを訴え始めます。「このとおり、わたしたちは自分の物を捨ててあなたに従って参りました。」

これに対してイエスさまは、言われました。「はっきり言うておく。神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子供を捨てた者はだれでも、この世ではその何倍もの報いを受け、後の世では永遠の命を受ける。」

神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子供を捨てた者。それは、絶縁するとか、関わらないようにするというのではなくて、自分の最も大切な愛する人たちよりも、まず神さまを一番に愛するということです。他のものではなく、神さまを中心にするということです。

そして、愛する人たちも、自分の持ち物も、すべて神さまのものとして、その御手にお委ねすればよいのです。その時、わたしたちは、神さまの御手から、すべてのものを、祝福の内に受け取り直すことになるでしょう。

永遠の命を受け継ぐ者とされて、イエスさまと共に、神さまのご支配の内に、この世の日々を歩いていくこと。その歩みをイエスさまは、「この世ではその何倍もの報いを受け、後の世では永遠の命を受ける。」この確かな約束の許に置いて下さっているのです。

ペトロはこの時点で、完璧に神さま中心の思いで歩むことが出来ていた訳ではないでしょう。ペトロは後に、十字架に架けられるイエスさまを裏切ってしまうのです。そのペトロの罪も、弱さも、イエスさまは既によくご存じでした。

でも、イエスさまはペトロの信仰のために祈って下さいます。そして十字架の死から復活した後、イエスさまは、挫折し、打ち砕かれたペトロと出会い、立ち上がらせ、新しくし、イエスさまに喜んで、最期まで従っていく者へと変えて下さるのです。

そのご自分の救いの御業のゆえに、イエスさまはペトロに、そしてわたしたちに、この約束の御言葉を語って下さったに違いありません。

神にはできる。わたしたちは、この御言葉を信じたいのです。

この御言葉が真実であることの証しとして、神の御子イエスさまの十字架の死と復活の御業が、わたしたちの世に、歴史の中に、はっきりと示されています。わたしたちの救いのために、世に低く降り、苦しみを引き受け、ご自分の命さえ与えて下さることがお出来になるイエスさま。

神にはできる。わたしたちは何も出来ないけれど、神さまには、わたしたちを救うことがお出来になる。愛することが出来ないわたしたちを、神さまは何かがあっても愛し抜いて下さることがお出来になる。そして、わたしたちを愛する者へと新しく造り変えることがお出来になる。それはまったく、信じるべき、確かなことなのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

わたしたちは、自分の罪のどうしようもなさ、愛のなさに、御心に従うことの困難さに、ただただ悲しみを覚えます。

しかし、人間にはできないことも、神にはできる。この御言葉を心に刻ませて下さい。

イエスさまの十字架の死と復活の御業に、神さまがわたしたちを愛し抜いて下さることがお出来になる、救って下さることがお出来になる、そのことがはっきりと示されています。

あなたの御力によって、どうかわたしたちが、感謝と畏れと喜びを持って、救いの恵みを信じ、受け入れる者となる事が出来るようにして下さい。

そして、あなたの祝福によって、わたしたちが、あなたを、隣人を、まことに愛する者となる事が出来るように、あなたに従って歩む事が出来るように、導いて下さい。

イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン